

論文の和文要旨

論文題目：南琉球宮古語久松方言の文法記述

氏名：陶 天龍

本論文は、沖縄県宮古島の久松地区で話されている久松方言の文法を一次データに基づいて体系的・包括的に記述したものである。近年の琉球諸語研究の発展は目覚ましく、方言学（日本語学）・言語類型論的に興味深い現象が多数報告されてきているが、一部の音声・文法現象に関する研究が多かった反面、包括的な記述が少なかった。さらに琉球諸語研究の中でも宮古語は複数の記述文法書が執筆されているが、ほとんどは宮古本島周辺の離島で話されている方言を対象としており、宮古本島で話される諸方言（中央宮古方言群）の記述はほとんどなされていない。本論文では、言語類型論の知見を背景に置きながら、一般言語学の手法を用いて久松方言を体系的に記述することによって、中央宮古方言群の記述研究の空白を埋めるだけでなく、方言学・言語類型論に対して新たな知見を提供することを目的としたものである。本論文は 9 章で構成され、付録に自然談話を 2 編収録している。

第 1 章では、久松方言の地理・系統・話者数・久松方言の特徴などについて概説した。久松方言は、宮古本島の中西部に位置する久松地区で話されている宮古語の方言であり、中央宮古方言群の下位方言の一つである。久松地区は行政的に沖縄県宮古市平良地域に属し、久貝（*figabara* [fugabara]）と松原（*macibara* [matsibara]）の二つの集落からなる。久貝方言と松原方言は松原方言と久貝方言は、語彙においては、僅かな差異は見られるが、音声や文法などにおいては、ほぼ差異は見られていない。

第 2 章では、久松方言の音声・音韻について記述した。久松方言では、6つの母音（/a, i, u, (e), (o)/）と 17 の子音（/p, b, t, d, k, g, c [tɕ], z [dz], f, v [v~v], s, ʃ [z~z~s~ɕ], (h), m, n, r, j/）がある。同じ母音の連続は /aa, ii, uu, ii, ee, oo/ の 6 つがあり、異なる母音の連続は /ai, ui/ の 2 つがある。子音の中には、/ʒ, v, m, n/ のような音節主音になる成節子音（V_{sy}）もあり、音韻論的には子音と分析しているが、母音のスロットに入ることも可能である。母音が音節主音になる「母音音節」の音節構造は (((C)C)(G))V(V)(C) であり、成節子音が音節主音になる「成節子音音節」の音節構造は (C)V_{sy}(V_{sy})(C) である。形態音韻規則においては、長音化、子音削除、/t/ の破擦音化、//si//, //ʒ// の脱落、/ʒ/ の挿入、最小音韻語規則、連濁、子音無声化、音の交替、主題助詞と対格助詞の形態音韻規則について記述した。特に、対格助詞の形態音韻規則においては、一部の語が対格助詞 /ɟu/ を後続させる場合は、2 種類の形態が観察される。最後に、アクセントとイントネーションについて考察した。アクセントにおいては、1 つの音韻語は語中で HL...H のアクセントパターンは存在せず、HL...H のアクセントパターンが存在する場合は、その間に必ず音韻語の境界が存在すると結論付けられる。イントネーションにおいては、平叙文・命令文・疑問文の文末イントネーションについて記述した。

第3章では、記述する上で必要な文法用語を導入し、定義を明確にした。この章では、まず、音韻的自立性と文法的自立性という二つの概念を基に、「音韻語」と「文法語」の区別を明確にした。これにより、久松方言における語の分類が体系的に整理されている。次に、接語、接辞、語根、語幹、語幹拡張辞、拡張語幹、拡張形、複合語などの文法用語の定義を提示した。特に、語根・語幹・語幹拡張辞・複合語については、先行研究の問題点を整理していくつかの概念については再定義を行った。さらに複合語と音韻語／文法語の関係についても考察した上で、11の特徴でにより久松方言の品詞を名詞類・動詞・形容詞・形容名詞・連体詞・副詞・助詞・間投詞・接続詞に分けた。最後に、句・節・文、および主語・直接目的語・間接目的語の3つの主要な文法関係を定義した。

第4章では、名詞句について記述した。名詞句の従属部には名詞句、形容詞句、形容名詞句、動詞句、連体詞などが立つことができ、主要部には一般名詞、代名詞、数詞、形式名詞および準体節構文が立つことができる。特に形式名詞 *=su / suu, munu, kutu* と準体節は意味範囲が重なる部分もあり、その相違点も明確にした。各標示については、久松方言の13種類の格があり、それぞれ「主格 *=nu / =ga*」, 「属格 *=nu / =ga*」, 「対格 *=ju*」, 「与格 *=n*」, 「方向格 *=nka(i)*」, 「場所格1 *=nvuti / =nn(j)uti*」, 「場所格2 *=nki*」, 「奪格 *=kara*」, 「限界格 *=gami*」, 「共格 *=tu*」, 「具格 *=si(i)*」, 「比格 *=južža / =jussa*」, 「非活格 *=ja / =ba*」である。主格と属格はいずれも *=nu / =ga* が使われが、数詞（人間）を表す名詞類を標示する主格は *=nu* が使われ、属格は *=nu* も *=ga* も使われるというように、*=nu* と *=ga* の主格と属格における分布が異なる。なお、与格と方向格は異なる格助詞であるが、受益者を標示する場合、いずれの格も使えるというように、その意味領域には重なる部分もある。さらに久松方言における非活格（いわゆる第二対格）には *=ja / =ba* の2つあり、いずれも動作主性の低い自動詞の主語（S_p）および他動詞の目的語（P）を標示することが可能である。最後に、名詞項の意味役割については、受影者、動作主、道具、経験者、場所、時間、起点、経路、着点、目標、目的、受益者、様態、範囲、所有者の15個を認める。

第5章では、名詞類の記述を行った。まず、一般名詞については、項、述語名詞、名詞句の従属部として機能する例を示した。代名詞については、人称代名詞・再帰代名詞・指示代名詞・疑問代名詞があり、この章では主に人称代名詞と再帰代名詞の記述を行った。久松方言の人称代名詞には、1人称と2人称の代名詞のみがあり、それぞれ単数と複数の形式がある。再帰代名詞に関しては、*duu, naa, (d)uuna* の3つの形式を比較し、配分的複数の意味を持つかどうか、人称制限を持つかどうか、格標示の制限を持つかどうかの3つの面から詳しく記述した。次に、数詞に関しては、機能、形態論的特徴および統語論的特徴を記述した。最後に、名詞類の形態論的特徴として指小辞 *-gama*（小ささ、愛情、距離の近さ、量の少なさを表す）、複数接辞 *-ta, -nukja*（名詞の種類に応じた使い分け）、曖昧化接辞 *-nagi*（曖昧な時間や空間を示す）、および動詞化接辞 *-bas*（動名詞や形容名詞に適用可能）といった接辞を取り上げた。

第6章では、指示詞と疑問詞を中心とする代用形式について記述した。指示詞には、指示代名詞、指示連体詞、指示副詞がある。指示代名詞には一般指示詞 *kui* (近称) , *ui* (中称) , *kai* (遠称) と場所指示詞 *kuma* (近称) , *uma* (中称) , *kama* (遠称) があり、それぞれ複数形もある。また、一般指示詞の主題形と対格形は複数の形式がある。指示連体詞には、*kunu* (近称) , *unu* (中称) , *kanu* (遠称) がある。指示副詞は *(k)ansi* であり、近称・中称・遠称の違いはない。久松方言では、近称で使われる場合、*ku-* より *u-* のほうが使用頻度が高く、*u-* が *ku-* の意味を覆っているながら、*ku-* を駆逐しつつあるように考えられる。疑問詞には疑問代名詞と疑問副詞に分けられる。*noo* 「何」、*taa/too* 「誰」、*nza/iza* 「どこ」に関しては、単数形と複数形がある。なお、すべての疑問詞には不定形が存在する。最後に、*noo* 「何」、*too* 「誰」、*nz(j)u* 「どちら／とれ」の相違点を、説明要求・選択要求の観点から記述を行った。

第7章では、動詞について記述した。まず、動詞活用形の構成を「①非拡張語幹 (-②語幹拡張辞) -③屈折接辞」と分析し、接辞境界では形態音韻規則が適用されることがあることについて言及した。次に、動詞活用形を構成する動词语幹と語幹拡張辞の種類について記述した。動詞は *i* 拡張形と *a* 拡張形における語幹拡張辞の有無によって、母音語幹動詞 (V1) と子音語幹動詞 (V2) が区別される。続いて、推量非過去接辞や補助動詞構文を記述する上で重要な語彙アспектを取り上げた後、屈折接辞を定動詞接辞と副動詞接辞にわけて記述した。さらに、規則動詞と不規則動詞の区別にかかわる形態音韻規則を挙げ、規則動詞と不規則動詞を区別する4つの条件を提示し、12の不規則動詞の語幹を中心に記述を行った。最後に、派生接辞を記述し、補助動詞構文と軽動詞構文の2種類の両肢述語構文について記述した。

第8章では、形容詞と形容名詞についての記述である。まず、いわゆる形容詞相当形式の語性を検討し、非自立形式と自立形式の音韻的特徴、形態統語的特徴および形容詞相当形式が語と分析できる環境を記述した。次に、形容詞単独形・叙述形 (形容詞-*munu*) ・重複形 (RED-形容詞) ・指小形 (形容詞-*cca*) ・動詞形 (形容詞-*kar*) ・状態形 (形容詞-*fi*) ・名詞形 (形容詞-*sa*) ・類似形 (形容詞-*gi*) などの形容詞の諸形式について記述し、名詞修飾、叙述、動詞修飾など機能別形式およびその意味的相違点を明らかにした。最後に、形容名詞の分類およびその形態統語的機能についても考察した。形容名詞は *=nu* で名詞を修飾する *nu* 形容名詞と、*-na* で名詞を修飾する *na* 形容名詞に分けられる。*nu* 形容詞は形容詞の形態統語論的な性質をも併せ持つ非典型的な *nu* 形容名詞と、形容詞の形態統語論的な性質を持たない典型的な *nu* 形容名詞に分けられる。*na* 形容名詞はすべて日本語からの借用語である。

第9章では、取り立て助詞・情報構造助詞・接続助詞・終助詞・モーダル助詞について記述した。取り立て助詞は原則的に格助詞の直後に現れるものであるが、一部の格助詞は取り立て助詞の後続によって削除が義務的なものや任意のものがある。情報構造助詞は、原則的に格助詞のあとや補助動詞構文の主動詞のあとに現れるが、主題助詞は様々な取

り立て助詞のあとにも現れうる。焦点助詞には一般焦点 =*du*, 肯否疑問焦点 =*ju*, 疑問詞疑問焦点 =*ga*の3つがある。=*du*は一般焦点だけでなく, 肯否疑問焦点と疑問詞疑問焦点としても使われる。また, 若い世代の話者は, 焦点助詞の =*ju*を省略することが多い。接続助詞は主に従属節に後続する助詞である。終助詞は主に文末に現れ, いくつか連続して現れることも可能である。